

きずなづくり大賞2013 — 入選集 —

く地域と家族の

「つながり」

を強めよう

社会福祉法人  
東京都社会福祉協議会

# もくじ

きずなづくり大賞に寄せて

社会福祉法人 東京都社会福祉協議会 会長

古川 貞二郎

東京都知事賞

学び塾「猫の足あと」で

岸田 久恵…… 3

東京新聞賞

親族代行作戦

小山 澄子…… 11

東京都社会福祉協議会会長賞

「ファミリー」になった教室―

外国とつながる子どもたちの居場所として

出口 雅子…… 21

地域の空にはばたけ！

「コミュニケーションスペース・つばさ」

吉崎 洋子…… 28

みんなで子育て あずかりあい「あいあい」

前田 京子…… 34

運営委員会委員長賞

国際交流協会を通じ世界の方々との絆

渡辺 幸彦…… 43

受け継がれる交流

坂本 亜紀子…… 48

父から学んだ地域の絆

大西 賢…… 56

子育て自助サークルを立ち上げて

林 夏子…… 63

「P—地さーくる」の事

菊池とも子…… 70

家族を超えて

岩岡いづみ…… 76

敬老会から自治会活動へ

岡本芳己…… 82

東京と東北をつなぐ架け橋

平田礼王…… 87

（東京都社会福祉協議会会長賞、運営委員会委員長賞は受付順で掲載しています）

きずなづくり大賞2013「地域と家族の「つながり」を強めよう」資料

※作品の著作権は東京都社会福祉協議会に属します

作品の個人名の表記については、作者より、ご本人の了解をいただいています

（一部仮名の場合もあります。）

# きずなづくり大賞に寄せて

社会福祉法人 東京都社会福祉協議会 会長

古川 貞二郎

昨年は、2020年の夏季オリンピック・パラリンピックの東京開催、サッカーワールドカップブラジル大会出場の決定等で、喜びや期待に沸き立った一方、10月には、台風26号が、伊豆大島に土石流災害をもたらしました。多くの社会福祉関係者やボランティアにより支援活動が行われております。町の中では、互いに支え合って、この災害を乗り越えようと、住民交流会（サロン）の運営や全島民を対象とする広報誌の発行が始まっていると伺います。このつながりの輪が大きく拡がっていくことを期待しております。

また、高齢者や子育て世帯、若者等の孤立が大きな社会問題になっている今日、都市部におけるつながりの希薄さを埋めるために、挨拶や声掛けをすすめ、地域の見回りや回覧板の実施、多世代の交流の場（居場所）を作るなど、顔の見える近隣のつながりを築いて

いくきめ細かな小地域福祉活動の実践が着実に広まっております。さらに、災害時や困ったときに、それを見せることによりサポートを受け易くするための『ヘルプカード』が、障害等のある方と周辺の人をつなぐ手助けのツールとして急速に普及しております。

このように、多くの人々によって創意工夫に満ちた様々な取り組みが行われていることを嬉しく、心強く思っております。

2007年から始まりました「家族力大賞」ですが、家族に留まらず、人と人、地域と地域とのきずなやつながりの体験をより多くお寄せいただきたいとの願いをこめて、7回目を迎える今回から、「きずなづくり大賞」と名称を新たにして、広く体験談を募集しましたところ、多くの心あたたまる作品が寄せられました。

たとえば、経済的な問題で塾に通えない中学3年生を対象とした無償の学習支援を、教員の経験を活かして家族と取り組んだお話、息子の結婚式に際し、子育ての時に自主保育で助けあった、血縁ではない仲間達が出席し祝ってくれて、その結びつきを実感したお話、団地の空き店舗を借りて、地域の子どもから高齢者までが集える居場所づくりに取り組んだお話など、お書きになられた方々の、深い思いや共感、連帯感、更には諸々の課題に立

ち向かう力強さなど感銘する事例が多く、家族や地域の新しい関係を築くための多くのヒントが含まれていると感じました。これらの貴重な実践と体験が、家族や地域のあり方を考え、地域の力をより一層高める一助となれば幸いです。

東京都知事賞







## 学び塾「猫の足あと」で

岸田 久恵

58歳（東京都西東京市）

4月、玄関先に顔を見せた修介君（仮名）は、はにかんだ笑顔で自分のお小遣いで買ったチョコレート箱を差し出しました。お礼の言葉とともにぺこりと頭を下げた。

修介君はその春、都立の定時制高校への進学を果たしました。我が家の無料学習塾「猫の足あと」の一期生です。彼は、市内の中学校の3年生でした。知り合いの先生からぜひお願いしたいと紹介された生徒です。集団での授業ではなかなか理解できないこと、不況やお父さんの病気が重なり経済的に厳しいことで、高校進学に不安をもっていました。

2011年、我が家が始めた学び塾「猫の足あと」は、都立高校を志望する、塾に行っていない中学3年生を対象とした無料の勉強会です。子どもの貧困問題にかかわるようになって、子どもたちを支援する様々な人や団体と出会いました。その中で、「お金がなけ

れば学校に行けない」実態に強く心を痛めることになりました。保険証がなくて病院に行けない子ども、給食のない夏休みにやせてしまう子どものことが報道された頃です。教材費や給食費が払えない、修学旅行の費用が出せなくて参加しない、入学金や授業料が払えず進学を断念する子どもや学生のこともしりました。経済格差が教育格差につながることも実感しました。

そうした現状に対して、福祉の現場では主に生活保護家庭の子どもの学習支援が20数年も前から行われていることも知りました。私は教員です。子どもの学習には責任のある立場です。学校現場で、そうした子どもや保護者に出会いながら、学校の中だけでできることの限界にも心を痛めていました。それだからこそ、いろいろな立場や職業の方がとりくんでいることを知り、私でも出来ることはないかと、自宅での支援を考えたのです。

自宅で行うためには家族の協力が必要です。2月のある日、私は家族会議を招集しました。我が家は、中学校数学教師の夫と小学校教師の私、大学2年生の娘、そして、大学受験を目指す息子の4人家族です。家族会議と言っても大げさなものではなく、夕食時に、実はこういうことを始めたいけれどどう、と提案したのでした。はじめに、息子が、

「いいんじゃない。やってもいいよ。」

と言ってくれました。そして、娘は、

「家庭教師や塾でバイトをしてきて、教えることは好きだからやるよ。友だちも誘ってみる。」

と言ってくれました。夫は無言でしたが、これは了承ということで判断しました。後に新聞のインタビューを受けた時に「やりたければやれば」と思ったと答えていましたから、あうんの呼吸というところでしょうか。その反応も含めて、私が代表、娘が副代表、夫は顧問ということになりました。名前は、息子が猫に関係のある名前にしようと言ったので、あれこれ考え、学び塾「猫の足あと」と命名しました。

実は私は、息子がどんな反応を示すかが気になっていました。その時、息子は順調に行っていたら高校3年生になっている年齢でしたが、高校を中退して高認をとり、とりあえずは大学進学を目指している状態だったのです。都立高校に合格したものの、起立性障害で朝起きられないことが何度かあり、その頃、クラスメイトと行き違うことがあったらしい息子は、2学期から学校に行けない日が増え、単位が足らなくなっていました。

精神科を受診し、双極性障害と診断もされました。転学も考えましたが、部活動の仲間  
に励まされ、留年を選択、もう一度高校1年生に挑戦したものの、1学期を終えて中退を  
決めました。本人はもちろん、家族も悩んでいる時期だったのです。ですから、息子が最  
初に賛成してくれたことがとてもうれしかったです。

立ち上げを決めてすぐに、西東京市の社会福祉協議会に相談しました。そこで、「ゆめ  
こらぼ」を紹介されました。「ゆめこらぼ」というのは、西東京市市民協働推進センター  
のことです。市内のNPOや市民団体が登録しています。すぐに事務所を訪れて、規約と  
会員名簿を提出すれば登録団体になれると聞いたので、すぐに規約を作り、家族と娘の友  
だちの名前を会員名簿に記して登録しに行きました。あんまり早くて驚かれましたが、次  
年度から始めるにはすぐに準備をしなければと思い、チラシを作り、娘と息子が卒業した  
地域の中学校を訪れて校長先生にもお願してきました。「ゆめこらぼ」のホームページにも、  
生徒募集のお知らせを出してもらいました。

3月、募集を始めて、修介君が第1号の生徒として来ることに。第2号の生徒は息子が  
小学校時代にやっていたサッカークラブに所属していた子で、息子が4年生の時に我が家

に泊まりに来たことがある寛太君（仮名）でした。その時にあんまりかわいくて6年生だった娘もよく覚えていた寛太君が、中学3年生になっての再登場、一気にテンションも上がりました。

2011年4月、生徒2人に娘と息子が1対1で教える勉強会がスタートしました。毎週月曜日の夜、自宅の一室で開いています。そして、勉強の間に夕食もいっしょに食べています。私は専ら夕食担当です。個食が広がり、食生活も貧困になりがちな子どもたちにも大勢でいっしょに食べる機会にも意味があると考えていました。思った以上に生徒と先生が仲良くなり、食物の支援をしたいという団体も現れるに至りました。

友だちを誘ったり、見学に来たり、チラシを見たりした生徒が来るようになり、7月には、生徒は5人になりました。娘の友だちが参加して、生徒5人に先生4人のにぎやかな勉強会になりました。お金のかかる私立は無理と、都立高校進学を目指す子が多いので、5教科の勉強、定期テストの対策、過去の入試問題挑戦、面接の練習と、受験が迫るにつれて勉強にも熱が入ってきました。ここでは、現役中学教師の夫もたくさん協力してくれました。

修介君も寛太君も、はじめは理解が進まず、自信が持てず、間違うことを恐れて答えら

れませんでした。やはり、個別指導で自信と力をつけていきました。それでも、修介君は、内申点が足りず、普通高校ではなく工業高校に願書を出すよう、学校で指導されました。

都立高校受験を目前にして、あろうことか修介君はインフルエンザにかかってしまいました。最悪の体調で臨んだ試験は、数学で40点もとったのですが不合格。都立の二次試験は倍率が高く、これも不合格に。もう高校には行かれないかもしれない、修介君だけでなくお母さんもかなり落ち込んでしまいました。まだ定時制の二次試験がある、修介君に本当はどの教科が好きなかを聞きました。そして、美術が一番好きだという修介君に、工業高校を紹介し、見学に行ってみよう勧めたのです。お母さんと工業高校を訪れた修介君はいっぺんで気に入り、「この高校に入りたい」と初めて自分から言ったそうです。そうして前向きに受験に臨み、見事合格することができたのです。

息子はその年、大学受験に失敗しましたが、さらに1年を経てこの春大学に進学し、今、教職課程をとっています。修介君たちに教えた経験が息子にも前向きな気持ちを与えてくれたようです。

東京新聞賞







## 親族代行作戦

小山 澄子

63歳  
(東京都多摩市)

長男のジュンの結婚式の日取りが決まった。東京から仙台へ大学に行き、医師になったが、大学を中心とした勤務医で、挙式後も東北に留まるとのこと。東京には戻らないと言う。寂しい話はそれだけではなかった。

「嫁さんの親族は15人も列席するんだ。こっちはオレを入れても兄弟3人と父さん母さんの総勢5人だろ。オレは当事者だから4人。うちの親戚、どうにかならないの」

「こればかりはピンチヒッターができないからねえ。父さんは兄弟がいない。母さんの方は○××△△…だめだ」

「おばさんとかいなかったっけ？」

「わけのわからない人に来て貰ってもしょうが無いと思うけど」

彼女の結婚に対する親族の熱い支援に比べてなんと貧弱なわが家の後見人たち。結婚の祝いは親族数の勝負ではないと言おうとしたが、言い切れなかった。

「出席者が足りないところは、ジュンが小さい頃から好きだった：ウォンバットとか福助さん、お地蔵さんに来て貰ったら？」

「どうやって」。三男が笑いながら聞いてくる。

「ぬいぐるみをテーブルにおいて見守ってもらおうよ」

「母さん、結婚式は、遊びごっこじゃない。真剣！集中」と、長男にあっさりかわされてしまった。ここにきて真剣に集中して親族の問題が浮上した。夫の方にはお願いする親戚がないので、心当たりがありそうなのは、わたしの方だけだった。

私達の結婚式は実家の父が反対をしたので執り行われなかった。子供が生まれた時点で事後承諾の形で、実家で「お披露目」をした。実家は山口県の瀬戸内海側にある町。わたしの実態「東京の大学に行って同棲して子供が出来た！」

このスキヤンダルを私の一族はどのように飲み込んだのだろう。1970年代は未だ未だこの町は保守的であった。又それ以前に「人の道に反する」と、言った人もいたほどだ

ったのだ。それらを想像する度ごとに、故郷での評判に蓋をするように東京で意固地になり、私は実家と距離を置いた。

身寄りの居ない東京暮らしは、瀬戸の花嫁の暗い小島なのだった。

長男と2人。仕事熱心な夫は朝から晩までいなかった。しかし、わたしは、1人でもしやうがないが、子供は1人にしてはいけない。地域で育つものなのだからと思い、「自主保育しませんか」の広告を作って、仲間を募った。「自主保育めだか」の誕生。運良く近所の方に幼児教育に詳しく実践もしてこられた方がいらっしゃったので、幼児教育の大切さを教えて頂いた。その方は「幼児の時期の体験、思いはほとんど意識には残らず無意識の中に沈んでいきますが、その無意識こそが大切で、これがその子を豊かにするのです。多くのモノを考え、体験することが肥やしになりますよ」と教えてくださった。

この言葉を念頭に集った2歳半から3歳の子供をもつ母子6組12人は「めだか」を縁にその後ずっと深い絆で結ばれた友となったのだ。

今思う。「なぜ、幼児期一緒に過ごしたくらいでこのようにも深く熱く結びつくことが

できたんだろうか」

私達は皆さまざまな事情で地方から上京し東京のニュータウンで子供を持ったニューファミリーいわば、皆が一代目だった。だから、それなりに子育てに必死だったのだ。

自主保育は中学校のクラブハウスを借りて週に3回集まった。親が2人ずつ付き添うと決め、月初めには予定を組み、図画工作・誕生日会・大きな家造り・冒険・散歩・踊り・合唱などのスケジュールを決めた。物作りや集団行動を通して私達母親はそこでくりひろげられる幼い子供達の世界に感動し、憤慨した。小さな集団でも強いモノと弱いモノが存在することを知った。

どんなにまわりが騒がしくとも決して集団に入らず黙々とブロックを作り続けている子。

どういうわけか他の女の子にちよっかいを出していじめてしまう子。いつもいじめられているのにその子についていってしまう子。私達は意見を交わした。

「どうやって集団の中に入らない子をいれていくか」

「いじめられてはいるけれど、よく見ているとそのいじめる子にある魅力を感じている

らしいこと」

「乱暴で他の子を痛めつける子に、他の子は怖がって近寄らない。暴力じゃなくて素敵などところがあるのを皆に教えていこう」

「障害を持つ子が集団に入らず、全く一人勝手な行動をするのを、見て見ぬふりをする子供達にイカりをぶつけた『あんた達、あの子を放っておいて自分達だけ誕生日会をするの？それでいいの？』」

その世界は私達大人の世界そのものだった。社会の生の現場に立っているようで、私達は共に泣いたり泣かされたり、励ましたり励まされたり、悔しがったり喜んだりして、子供とともに成長した。

この自主保育はそれぞれが弟妹を持ったらまた続ける。他の人達も新たに加わるという具合で、家の次男のサト、三男・ガイがこの「めだか」を卒業するまでに述べ42人の親子と知り合いになった。その後、子供達はそれぞれ別の幼稚園、学校に入っていたが、親も子も気持ちの繋がりは持ち続けたままだった。だから、私が長男のめだかの時の仲間「ジュンはね、幻の親族を夢みている」と、愚痴った時、

「あらまあ、ジュンちゃん意外に常識的ね。あなたの言うウォンバットにわたしがなるよ。あの、お使いを頼まれたのに、何をかうののかも聞かないでさっさと行っちゃおうおっちょこちよいのジュンちゃんがねえ。あの幼かったジュンちゃんが、嫁さんをもらうんだねえ」

「じゃあ、あたしがお地藏さんになるよ。お嫁さんも見たいしね」

「そうそう、わたしも行くよ。帰りに温泉行こうよ。ええと、わたしは何だっけ？」  
「福助でしょ」「ああ、そうだ」と、言って笑っている。

私はこのときはつきり気がついた。近所の人から「1人で3人の男の子をよく育てられましたね」と、言われたことを思い出した。あのとき、

「いや、みんなで育ちました。みんなで助け合って育ったんです」と、言うべきだったんだ。後日そのことを長男に言った。

「みんなで来てくれるってよ。でも、どうしても血の繋がった親族でないといけないというなら母さん、勇気を出して山口に帰って頭下げるけど」

「ユウタやケンタ、ユウの母さんが来るの？いいけど、ユウタやケンタ、ユウは友達席

で呼ぶつもりだよ」

「そうなの？」

「当たり前、ずーっとずーっと昔、いつの頃からあいつらといたのか思い出せないけど、俺ら家族のように一緒にいたよ。親族の惑星族みたいなもの」

「そうだね絆というものだね」

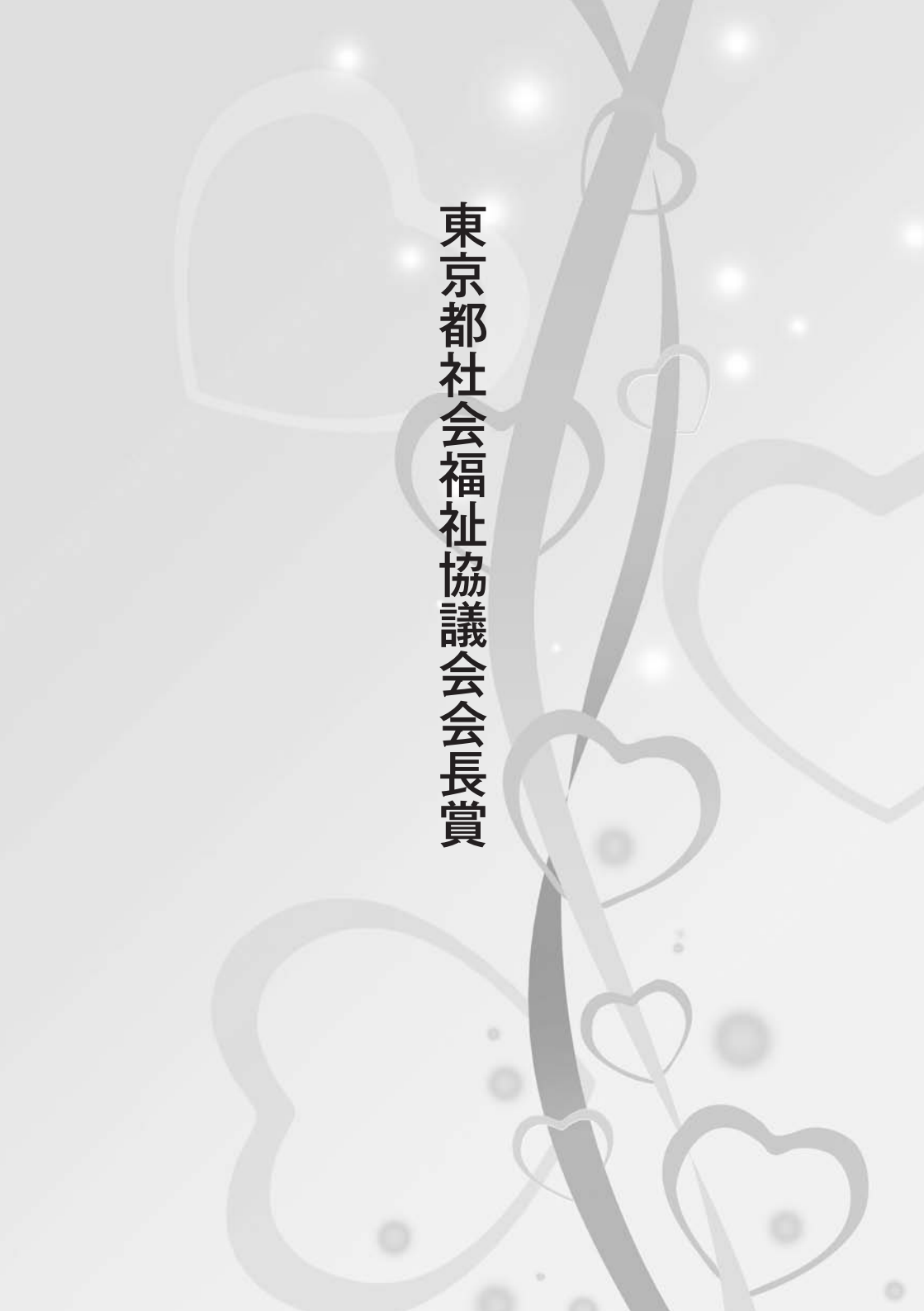
「何もしなければ何も生まれない。何か取り組んでいけばいいも悪いも関わりが出来る。そしてそれが人間の深い所での結びつきになってくる。この絆は一生もんだ。」

親族代行作戦はこうして始まったのだ。





東京都社会福祉協議会会長賞





## 「ファミリー」になった教室―外国とつながる子どもたちの居場所として

出口 雅子 45歳（東京都三鷹市）

ピナット子どもの日本語・学習支援教室

「ピナットハ、ファミリーダカラ…」

ある日、高校1年生のケン君（仮名。以下名前はすべて仮名）がポツリと言った。小学6年生の時、アメリカ人の父親の再婚に伴い来日したケン。全く日本語が分からないケンにとって、日本での生活はとまどいの連続だったことだろう。ケンがピナット教室に参加するようになった中学1年の夏、彼はなんとか日本を脱出してアメリカに帰ることしか頭がないような、やたらつっぱった小柄な少年だった。

「俺は、こんなところに来たくないんだ。すぐアメリカに帰るんだから、日本語を勉強する必要もない。だから俺に何か教えてあげようなんて思わないことだね」と担当のボランティア・スタッフに英語で冷たく言い放ったり、誰かが英語で話しかけても「今ぜんぜ

ん話す気になれないから！」とか「俺の先生でもないのに、話しかけないでください！」と、いつもとんがっていた。

そんなケンからの「ピナットはファミリー」発言。驚くと共に、彼が教室に通った3年間の年月を経て、ここが彼にとって、学校とも家族とも違う、一つの、安心できる居場所になったんだな、としみじみ思った。

ここ、「ピナット子ども日本語・学習支援教室」には、外国とつながる子どもたちが水曜日と金曜日の放課後に集まり、ボランティア・スタッフと一緒に日本語や学校の教科を勉強している。ボランティア・スタッフは、大学生や社会人、定年退職した人たち。

「外国人の子どもに勉強を教える」と聞くと、「楽しそう！」と思われるかもしれない。しかし、ピナット教室に来る子どもたちの中には、ケンのように自分の置かれている状況を受け入れることができず、やり場のない怒りや言葉にできない苛立ちを抱えている子どもも少なくない。彼らからぶつけられる怒りや悲しみを受け止めることも、ボランティアたちの重要な役割の一つだ。

リサさんの父親は、彼女が幼い頃に出稼ぎのため日本に渡り、彼女が小学6年生になっ

た年にリサを日本に呼び寄せた。リサはずっと離れて暮らしてきた父親に「迷惑や心配をかけてはいけない」と、家で弱音を吐くことができず、日々のストレスをピナットのボランティアにぶつけることで解消していた。母国では優秀な成績を収めていたリサは「先生の教え方が下手だから、全然わからない！」とよくボランティアに逆切れた。

シングルマザーの母親の留学に伴い、小学4年生で来日したアナさん。母が日本社会に馴染めず精神的に不安定になった。母親を一人で支えなければならぬアナは、ある時から「私には妹がいるの。ウソの妹だけどね」と空想の世界に生きはじめた。

教室には、海外で生まれ育って来日した子だけでなく、日本で生まれ育つたり、小学校入学前に来日した子も参加している。彼らは「母語並み」に日本語が話せる。

家族の中で一番日本語ができる中学生のトイさんは、生活保護の書類から親の入院や治療の手続き、年の離れた弟の世話まで、1人で背負っている。学校でも「しっかり者」と見られ、頼られっぱなしの大人びたトイ。教室では、お姉さんのようなボランティアに、「私だって誰かを頼りたいのに……」と弱音をまくこともある。

小学校低学年まで母の国と日本を行き来していたユキさんは、日本語も母の言語も話せ

る「バイリンガル」だった。しかし中学生になると勉強の内容は抽象的になり、日本語でも母の母語でも理解できなくなっていく。友人関係や進路の悩みなど、複雑な話しも日本語でも母の言語でも説明できない。悩みを相談する「言語」を何も持たない彼女は、いつも不安げで頼りない。

大人の都合で、慣れ親しんだ国や友人、文化から引き離され、日本では勉強も友人関係も思い通りにいかないケンやリサやアナ。日本語を母語としない親のもと日本で育ち、親の言語も日本語も年相応に使えなかったり、相談相手がないトイやユキ。抱える課題は異なるが、自分の苦しみを学校の先生やクラスメート、家族にさえ理解してもらえないしんどさは共通する。

こういう子どもたちに、日本語の勉強や学校の宿題をさせようとしても、むずかしい。学校でも家庭でも緊張した状態が続く子どもたちにとって、ピナット教室は唯一、ストレスを発散し、ホッとできる場所なのかもしれない。ここではボランティアに八つ当たりしても許されるし、言葉を補ってもらいながらゆっくり話しを聞いてもらえる。同じ境遇の子ども同士で共感し合えることもある。誰かに聞いてもらおうことで、気持ちりが軽くなり、

思い通りにいかない日々を少し肯定的に捉えることができるようになる。そういう安心感の中で、ようやく前に進む気持ちになっていくのではないかと思う。

つっぱっていたケン君は、それでも教室に通い続け、担当のボランティアたちも寄り添い続けた。そのうちに、担当のボランティアにはこっそり秘密の相談もするようになった。何気ないおしゃべりの中から彼が言語学に興味を持っていることが分かり、近くの大学の言語学の教授に協力してもらい、お話を聞かせてもらうこともできた。彼は少しずつ将来に対して前向きになり、まわりの人に心を開いていった。いつの頃からかケン、年下の子どもたちに声をかけ、新しいボランティアに気をつかう、教室の一番のムードメーカーになっていた。

「最初の頃は、みんなのことを『自分とは関係ない』って思っていた。でも毎週、同じ教室で会うんだから、ちょっとは話そうかな、その方がいいかなって思うようになって。それで、しゃべるようになって、自分の経験からアドバイスしたりとか、それ良くないよ、とか…。ピナットは『ファミリー』だから、ただの友だちだったら言わないような厳しいことも、相手のために本音で話し合える。他の子とも先生とも、信頼関係があるから言え

ることもある。」3年前は話してもくれなかったケンが、今こうしてピナット教室への思いを日本語で語ってくれている。

教室では時々、日本で差別された経験や、母国や日本社会に対する思いなどが話題になる。きつと日本人の友人や家族とは話し合えないような内容も、教室のメンバーとなら安心して話題にすることができ、自分の本音を語ることもできるのだろう。教室のボランティア・スタッフたちも、そんな貴重な意見に耳を澄まし、対等な立場で自分の意見を伝え、みんなと一緒に日本人や日本社会のあり方について考えさせられている。ケンが言う「ファミリー」は、「安心して自分らしく居られる場」であり、また「お互いに関わり合いながら成長していける場」という意味も含まれているのではないかと思う。

ピナット教室は、2005年に台湾とフィリピンから来た3人の小学生への支援から始まり、この8年間で11カ国36人の外国とつながる子どもたちが教室に参加した。ボランティアの数は、その2倍、3倍にもものぼる。「ファミリー」と考えると、かなりの拡大家族に育った。

三鷹市は彼らのような外国とつながる子どもがそれほど多く住んでいる地域ではない。



だからこそ、教室で出会った人同士の絆は深くなる。これからも学校や家庭で孤立している外国とつながる子どもたちの「ファミリー」であり続けたいし、彼らが将来ここから巣立った後も、いつでも帰ってきてこられる場として、息長く活動を続けていきたい。

## 地域の空にはばたけ！「コミュニティスペース・つばさ」

吉崎 洋子 68歳（東京都町田市）

並べた椅子が足りないほどの満席の中、美しいソプラノの歌声が響いて、「コミュニティスペース・つばさ」は、2013年7月1日、開設一周年を迎えました。歌い手も観客も藤の台団地とその周辺に住む地域の方々です。

前年の5月、ショッピングセンターの店舗（1・2階）の一つが空くことになった時、内装をそのままに借りることができるのを知りました。地域の溜まり場が欲しいと思っていた私たちは、急遽一口10000円の賛同金を集め、見切り発車して「コミュニティひろば・藤の台」を結成、UR都市機構との賃貸契約にこぎつけました。借りた店舗を「コミュニティスペース・つばさ」と名づけ、思いついたことはまずやってみようをモットーに活動を開始しました。向こう見ずな決断をした面々は、70歳前後、元気なアラセブの男女

でした。

首都東京のベッドタウンとして発展した町田市では、1970年代に多くの団地が建設され、30代40代の若い世帯が移り住んで、当時は子どもたちの声が溢れていました。それから40年余り、子どもたちは成長して独立し、団地には高齢者となった親が残されました。

私の住む藤の台団地は賃貸と分譲を合わせて3435戸、65歳以上が35%を超え、3分の1が高齢者のみの世帯です。団地自治会では、1995年に高齢者対象の「お食事とおしゃべり会」を開催したのを皮切りに「助け合いの会」や「花の会」が発足し、2010年には、「高齢者見守り支援ネットワーク」の活動も始まりました。

そんな中、「つばさ」は、地域に住む子どもから高齢者までが集い、様々な活動を展開するための空間と機会を提供する場として誕生したのです。

活動は全くの手探りでしたが、それぞれが地域活動や仕事で培った経験を持ち寄って組み立てをし、まずは実行、その中から良かったものは残し、修正・削除を経て、形を作っていました。

一番の目的であった地域の人々の交流の場とするために、月々木の12時～17時、1階を

オープンスペースとして開放し、囲碁、将棋、麻雀、オセロ、トランプなどの遊具を置いて自由に使えることにしました。時間になるといそいそと集まってくるのは、リタイアしたお父さんたち。麻雀や囲碁を通して、地域に大勢の仲間ができたようです。また、金曜日はカラオケ専用として、こちらも毎週賑わっています。

しかし、この状況が定着してくると、「つばさ」の使い方が限定的になる傾向がでてきます。そこで、この時間帯の中で、ボランティア講師による水彩画、手芸、中国語、などの時間を設け、多様な入り口を作りました。一年経った今、これらはサークルに発展して活動を続けています。そのほかにもウクレレ、切り絵のサークルが発足し、すでにあつた体操や手話、英語などのサークルとともに、2階のスペースを利用して活動が行われています。

1年間で延べ5000人もの利用者があつた「つばさ」ですが、ここを維持していくには当然のことながら家賃、光熱費などの経費がかかります。100%無償ボランティアによる運営とはいえ、年間にして最低170万円ほどの予算組みが必要です。

2012年の暮れに、東京都の認証を得てNPO法人となりましたが、NPOとしての

目的（地域コミュニティの場を作る）活動自体が収益を伴うものとしてようと考え、財政の柱を3本立てました。1つ目は、「つばさ」の利用には、原則会員になり20000円の年会費を払っていただくこととしました。2つ目は、リサイクルを中心とした月1回の「市」の開催です。地域の中で不用品がくるくると回る「市」を通して、品物を提供する人、売りの子のボランティア、買う人の交流が実現し、また「つばさ」を支える大きな財源となっています。3つ目は、空き時間・空きスペースをサークル等の利用に供する、有料の時間利用の仕組みです。この3本柱に個人の寄付金加わり、初年度はなんとか赤字にならずに済みました。

もう一つ心にかかっていたのは、子どもたちの居場所作りです。近年、子どもを取り巻く社会環境は良好とは言えず、安心して放課後を過ごせる場所が地域に必要ではないかと考えていました。現在「つばさ」には、4時頃になると、小学生たちがやってきて、宿題をしたり、置いてあるアナログのゲームをしたりして過ごすようになりました。年2回「キッズデイ」と銘打ったイベントも開催して、紙芝居や手芸、工作、昔遊びなどを通して、地域の大人との交流の場となっています。

1階、2階それぞれ50平米ほどの空間ながら、出来ることはまだまだあります。4月から月1回、夜のシネマサロン（映画会）を始めました。11月には、サークルの方々の成果を展示・発表する「文化祭」を開催します。誰かが「〜したいね」とつぶやくと「じゃあ、やってみようよ」となるのが「つばさ流」なのです。

「つばさ」に集う人たちにも変化が見られるようになってきました。利用するだけだった、シャイなお父さんたちが、いつのまにかオープンスペースの片付けやイベントの手伝いをしてきています。

団地には一人暮らしの高齢者が増えてきています。住み慣れた場所で最後まで暮らし続けることができるのか、大きな課題です。麻雀が大好きで「つばさ」に通ってきていた90過ぎのKさんという女性の方がおりました。彼女は、大変しつかりした方で、自立して一人暮らしをされていました。高齢になり、次第に足元がおぼつかなくなってくると、よく麻雀仲間がお迎えに行っていました。しばらく姿を見せないと気にかけて電話で安否を気遣いました。最後の頃には入退院を繰り返しましたが、退院すると「つばさ」に顔をだしました。Kさんが永眠されたあと、「つばさ」に麻雀仲間を訪ねて来られた娘さんが「母

は、この地域で大勢の仲間にも恵まれ、本当に良い晩年を送ることができました」と話されたそうです。

人の晩年を支える医療や介護の仕組みは、国や自治体が制度として充実させていく必要があります。しかし、どんな素晴らしい仕組みがあっても、人はそれだけでは幸せな人生を送ることはできないのではないのでしょうか。家族や地域といった人と人との絆を実感しながら1日1日を大切に過ごすことが出来る、それは高齢者だけでなく、この社会に生きる全ての人に通じる幸せであると思います。「つばさ」で世代を超えた人々が出会い、ここが活気ある地域となるように願って、活動を続けていくつもりです。

## みんなで子育て あずかりあい「あいあい」

前田 京子 42歳（東京都品川区）

東京都品川区、商業ビルの建ち並ぶJR大井町駅のすぐ近くに品川区立大井倉田児童センターがあります。通りから少し奥まったところにあるため、初めての人にはわかりにくい場所ですが、品川区の児童センターにしては珍しく土のお庭があり、電車も眺められるという子どもに人気の児童センターです。

その一室で行われているのが2004年からママたちの自主的な活動として続けている「あずかりあい相互支援自主サークル「あいあい」」です。

来年で10年を迎えるこの活動は、当時3歳の子どもを育てていた私の孤独な子育て体験から産み出されたものでした。

第1子の出産後、身近に頼れる親族のいなかった私は、もともと夫婦2人だけで力を合



わけて子どもを育てていこう、と意気込んでいました。実は、新婚当初は「子どもなんていなくてもいいかな？」と思っていました。それが、「子どもを育てる」ということに夫婦2人でチャレンジしていきたい、と思ったからこそ妊娠に踏み切ったので、2人とも初めての子育てへの意気込みは並々ならぬものでした。

ところが、夫の仕事は忙しく不在がちで、宇宙からやってきたかのような未知の生物「新生児」と新米母だけの生活は思っていた以上に過酷でした。物理的にも時間的にも精神的にもあつという間にいっぱいになりました。もちろん愛しくかわいい赤ちゃんではありません。でも、四六時中、家の中で2人だけ。言葉の通じない赤ちゃんとべつたりの生活。息の詰まる思いでいっぱいになった私は、『誰かにほんの少しでもいいから子どもをみてもらって、ほっと一息つきたい』と思いました。

けれども、自分の中に、「子育てという新たなチャレンジに挑もう、と思って妊娠したのに、子どもを預けるなんて……。じゃあ、何のために子どもを産んだのか。ましてや自分がラクしたいがために、預けるなんて……」という気持ちが湧き上がり、『預けたい』という気持ちと『預けるなんて』という気持ちの2つの間で悶々と苦しみました。

そんなとき、他のママさんから「そんなに気にしなくても。ウチは実家が近いからよく預けたりするわよ」と聞き、ほっとしました。そして、私は私の心の中にあつた一つの壁を乗り越え、預けることを積極的に捉えられるようになり、いろいろな託児を利用するようになりました。区の託児付きの子育て講座にもよく通いました。

その講座の中で、「子どもを親だけで育てるなんて、歴史が始まって以来初めてのこと。昔は地域のみんなでみんなの子どもを育てていた。地域の力が弱くなっている現代。これからもっと地域で、みんなで子育てすることで地域の力も復活できるし、楽しく子育てが出来る社会になっていける。これからはみんなで子育て」という考え方に触れ、自分自身どんどん考えが変わっていきました。

託児を利用することについて一つの壁を乗り越えた私ですが、その当時は民間のベビールームなどを利用していました。そこでネックとなったのはお金の問題です。私の希望は「少しの間でいい。子どもと離れてほっと一息、コーヒーションで好きなコーヒーを飲みながら好きな本が読みたい!」というものだったのですが、当時そのために民間のベビールームを利用すると、最低でも1時間1500円ほどかかりました。また預けるなら2

時間以上という規程でしたので、2時間で3000円〜4000円ほどかかりました。そんなお金を専業主婦で収入のない私が自分のリフレッシュのために使っているのか、とここでまた悩みました。

そんなとき、カナダのプレイグループについて書いた本（『地域から生まれる支えあいの子育て―ふらつと子連れでDrop・in!』小出まみ著）に出会いました。そこにはこんな素敵な活動が紹介されていました。

・数人のお母さんが順番に子どもを預かる

・当番のときには数人の子どもを預かるけれど、自分が当番じゃないときには自由な時間が持てる

『これならお金はかからない!』と私の中にピーンとひらめきが降りてきました。そして日本版プレイグループあずかりあい「あいあい」は誕生しました。

カナダでは、何人もの子どもを当番のママが1人、自宅で預かるようですが、日本の住宅環境やママたちの育児力にはその方法は合わないのです。預かり合いの場所は児童センターで、預かり合う基本のグループは3人1組とし、2人のお母さんが3人の子どもの面倒

をみる、という形で活動を始めました。だんだんとメンバーも増え、活動は試行錯誤を繰り返しながらも軌道に乗ってきました。

実際に活動をしていく中で、共同で保育をすることによって、お金の問題以上に親や子どもの育ちにプラスの効果があることに気付きました。

まず、他の子どもを預かる番になった親は、自分の子ども以外の子どもをみることによって、自分の子どもを客観的にみることが出来るようになります。いろいろな子どもがいる、ということ、みんなちがってみんないい、ということに気付くのです。つまり、預かり合うということが、親の子育て力のアップに寄与するのです。

また、子どもは子ども同士で育ちあう機会を得られます。現代は、少子化できょうだいの数も減っているため、家の中で子ども同士がけんかしたり、助け合ったりする機会も減っています。そんな中、あずかりあい毎週のように顔を合わせ、子ども同士が疑似きょうだいのように育ちあっていくことができます。

そして、自分の子どもを預ける番になった親は、安心して子どもを預け、フリーな時間を得られます。家庭で子育て中の親にとって貴重な時間です。

さて、活動をさらに大きく広げていきたい、と思っていた矢先、私は夫の転勤で東京を離れなければいけなくなりました。あいあいの活動は、当時のメンバーに引きついでもらい泣く泣く東京を離れました。その後6年もの間、東京を離れていたのですが、縁あって再び東京に戻ってきたところ：「あいあい」は見事に続いていました。若いお母さんたちが「あいあい」の活動を受け継いでくれていたのです。メンバーもどんどん増えています。

「品川にあいあいがあるから、ここで二人目を産もうと思った」というのは、とあるメンバーが言ってくれた言葉です。『みんな子育て』、ここ東京品川に根付いてくれたようです。